

教会暦と聖書の流れ

教会の暦で、11月1日は諸聖人(すべての聖人)の祭日ですが、伝統的にその翌日にすべての死者を記念します。この日が日曜日にあると、主日のミサで死者のためのミサが行われます。この日の朗読箇所は特に決まっています。『教会暦と聖書朗読』(カトリック中央協議会発行)には、福音の箇所だけで19箇所も載っています(マタイ5章1-12a節、11章25-30節、25章1-13節、25章31-46節、マルコ15章33-39節、ルカ7章11-17節、12章35-40節、23章33,39-43節、23章44-46,50,52-53節、24章13-16,28-35節、ヨハネ5章24-29節、6章37-40節、6章51-58節、11章21-27節、11章32-45節、12章23-26節、14章1-6節、17章24-26節、19章17-18,25-29節)。ここで扱うのはヨハネ6章37-40節ですが、この箇所は主日のミサの朗読配分に入っていないので、たまには一緒に読んで味わってみるのもよいでしょう。

福音のヒント

(1) ヨハネ福音書6章は、イエスが5つのパンと2匹の魚で5,000人以上の人を満腹させた、という話から始まりました。そして、その翌日の話が22節から始まりますが、そこで「パン」についてのイエスと群衆の間の問答があります。「パン」は人のいのちを生かすもののシンボルです。イエスと群衆の間に交わされる対話で、ずっと問われているのは、「人を真に生かすものは何か」ということ



であり、35節でイエスは「わたしがいのちのパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない」と宣言することになります。なお、ここでは「イエスのものに来ること」と「イエスを信じること」は同じこととして考えられていますが、これはきょうの箇所(37節)でも同様です。「イエスが人を真に生かす『パン』である」とはどういうことでしょうか？ そのことを深く味わうために、5つのパンの出来事を振り返って見ましょう。

(2) このパンと魚の出来事は4つの福音書すべてが伝えている出来事です。パンを分け与えるイエスの動作をヨハネ福音書は次のように伝えます。「さて、イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えてから、座っている人々に分け与えられた。また、魚も同じようにして、欲しいだけ分け与えられた。」パンを配るときのイエスの動作には、目だった特徴があります。「パンを取る」のは「感謝の祈りを唱える」ためですが、まずこのパンについて神に感謝するのです。それはただ、「ここにパンがあってラッキー」というのではなく、「これは神が与えてくださったパンだ」ということを思い起こさせる動作です。このパンをと
おしていのちの源である神とのつながりを味わうのです。

そして「分け与えられた」と続きます。マルコ福音書ではこの箇所は、「イエスは五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで賛美の祈りを唱え、パンを裂いて、弟子たちに渡しては配らせ、二匹の魚も皆に分配された」となっています。「感謝」と「賛美」は、ヘブライ語やアラム語ではもともと同じ言葉です。ヨハネの「分け与える」とマルコの「裂いて、渡す」は同じ動作です。当時のパレスチナのふつうのパンは大きな円盤型のものでした。このパンを裂いて、皆に配るのです。この動作をとおして示されるのは、一つのパンを分かち合って食べる人と人とのつながりです。

イエスの食事の特徴は、いつもこうだったと言えるでしょう。たくさんのパンがあるからいのちが豊かに満たされる、というのではなく、わずかなパンでも、そのパンをとおして神とのつながりを確認し、一つのパンを分かち合う人と人とのつながりを確認し合う。ここにこそほんとうのいのちがあるのです。

(3) 孤立したいのちではなく、神とのつながり・人とのつながりの中にあるいのちこそ、イエスがその生涯すべてをかけて示したものだと言えるでしょう。「復活」とは、最後の最後まで徹底的に神に信頼し、すべての人を愛して生きたイエスのいのちが、十字架の死で終わってしまうようなものではなく、死を超えてもっと大きないのちとして完成していった、という信仰を表す言葉です。それは「神ご自身のいのち」と言ってもよいでしょう。イエスが言う「永遠のいのち」も、地上のいのちのレベルを超えた「永遠の神ご自身のいのちにあずかること」だと言ったらよいでしょう。死という厳しい現実を前にしてもなお、わたしたちはこの聖書のメッセージに希望をおくことができます。ここに信仰と愛をもって生きるわたしたちの生き方の根拠があるのです。

(4) 37節の「父がわたしにお与えになる人は皆、わたしのところに来る」という言葉は、まるで神が前もって信じる人と信じない人を決めてしまっているかのような言い方です。44節にも「わたしをお遣わしになった父が引き寄せてくださらなければ、だれもわたしのもとへ来ることはできない」という言葉があります。このような表現は、救いの根拠は人間にあるのではなく、人間を救おうとする神の意志にある、ということ(神のイニシアチブ)を強調する表現です。イエスを信じるかどうかの決断は人間に任されています。しかし、人が信じるとすれば、「それは人間の力によるのではなく、神が信じるようにしてくださったのだ」と感じる、そのような体験がこの表現の背景にはあります。

同じ 37 節の「わたしのもとに来る人を、わたしは決して追い出さない」は、わたしたちの教会共同体を考えると、たいへん示唆に富む言葉ではないでしょうか。このイエスの心をわたしたちの教会はどのように生きることができるでしょうか。具体的に、貧しい人、病気の人、外国から来た人、高齢の人、さまざまな障がいのある人、子どもや赤ん坊、これらの人々を決して追い出さず、「一人も失わない」共同体のあり方はどういうものが、について考えてみるとよいかもかもしれません。